

自然地理学における学びの基礎と展開

社会科専修・川瀬久美子

1. 本授業の概要

1) 授業の目的

本授業の目的は、日本の自然環境の特徴やその形成過程について学び、人間生活と自然環境の関わりについて理解を深めることである。対象は1回生であり、主に中学校社会科および高等学校地理歴史科の教員免許の取得を目指す教員養成課程の学生と、人間社会デザインコースの学生が履修している。学生には教育学部入学後初めての自然地理学の授業でもある。

授業の到達目標は、以下の2点である。

(1) 日本の自然環境の特徴について理解し、第四紀の環境変動のなかでそれらがどのように形成されてきたのか説明できる。

(2) 伝統的な人間生活が地域の自然条件にどのように規定されてきたのか、また、近年人間活動がどのように自然景観を改変しているのか理解し、これからの自然環境への関わり方について自分の考えをまとめることができる。

2) 授業内容と方法

授業では日本の自然景観を構成する地形について、地形単位ごとに整理しながらその特徴や形成過程について解説した。また、理科の地学的内容と差別化を図るため、自然環境と関係の深い伝統的な人間生活や最近の環境問題など、人間社会との関わりについても、積極的に取り上げた。

授業は市販のテキストをもとに進め、適宜プリントを配布した。テキストには地図やグラフなどの図表が豊富であるが、それらを見慣れていない学生への手助けになるよう、図表はスキャナーで取り込み、Power Pointで教室前のスクリーンに表示して、図の見方や見るべき点を指し示しながら解説した。また、取り扱っている地形や自然事象のイメージを喚起するため、自然景観の写真を数多く取り込んで同様に表示した。

図表の理解や解説に集中させるため、内容整理は板書ではなく、Power Point上で行った。ただし、表示内容のキーワードを空欄にした穴埋めプリントを配布し、学生の板書の時間・労力削減と、授業への集中を両立させるようにした。

内容の理解を確認するため、質問や感想を記入

するコメント用紙を、毎回の授業終了後に記入させ回収した。授業初回に、A3用紙1枚を配布し3回折りたたませると、折り目が片面8区分(両面で16区分)の境界線となる。授業1回につき1区分を用いて質問や感想を記入させ、次の回には教員が返答を書いて返却する、ということを繰り返した。これは、学生にとっては、毎回の授業の振り返りになり、教員にとっては受講生の理解度の確認と出席回数のチェックになる。コメントの内容に対しては、書き込みで答えたり、授業の初回に全員に対して復習や解説を加えて補足した。

2. 授業公開

1) 公開授業の内容

授業公開時は、平野の自然地理学的な特徴について講義を行った。受講生にコメント用紙を返却した後、(1)平野の地形的特徴と形成過程を理解する。(2)平野で発生する自然災害について考えるという、本時の目標を明示した。授業の前半は平野の形成過程について整理し、河川の堆積物が海岸を埋め立てて平野が発達したことや、その形成過程が過去約2万年の海水準の上昇から大きな影響を受けていることを解説した。中盤は、平野において見られる扇状地や自然堤防などの地形を、風景写真や衛星画像を提示しながら紹介した。後半は、日本の代表的な平野である濃尾平野を取り上げ、扇状地—自然堤防—三角州という模式的な地形配列が見られることや、平野の形成には堆積盆の沈降という地殻変動も深く関わっていることを解説した。本時の目標の一つである、平野で発生する自然災害については、時間が足りなくなったため、次回に持ち越した。

2) 授業公開参加者からの意見

2名の教員に授業を参観していただき、意見をいただいた。まず、授業の方法としては、図表や写真が多く紹介されていて、とても詳しく分かり易かったという肯定的な講評をいただいた。一方、現在の授業に特段に改善すべき点はないが、「教員が少しがんばりすぎ」で、受講生に地形図の読図作業をさせるなど、少し教員が息をつけるよう

な工夫をしてはどうか、という助言がなされた。

3. 授業改善案と今後の課題

1) 公開授業の省察

助言者からの意見を踏まえて、公開授業の省察を行いたい。本授業は、大学入学後初めての自然地理学の授業であり、学生によっては4年間の大学生活で自然地理学を学ぶ唯一の機会である場合もある。また、受講生の高等学校時代の地理の履修状況はきわめて低く悪く、高等学校の地理の基礎知識を踏まえた専門授業というのは行えない。このため、本授業では「基本から分かり易く」「一般教養として最低限の自然地理学的知識の修得」の両方を目指している。しかし、最低限の自然地理学的知識といっても、自然地理学では様々な事象が相互に関連しあっていることが多く、絞り混みが難しいところである。どうしても授業時間に対して内容が過重気味であり、ゆとりを持った授業にしがたい傾向がここ数年続いている。この点については、さらに内容を精選することによって、対応していきたい。

内容が多すぎるほかに、「教員ががんばりすぎ」と見られたのは、授業を教員主導で進め過ぎているということなのかもしれない。この点については、大学からは双方向性の授業をするよう求められ、学生からは例年「購入した教科書を出来るだけ活用してほしい」という要望がしばしば寄せられるので、教員による内容解説の合間に、学生を指名して教科書の重要部分を音読させたり、「なぜある場所でだけそのような事象が起こるのか」を問いかけて学生に考えさせたりしている。しかし、教科書の音読では、近年漢字の読めない学生が増加したり、地理では難読地名が登場したりするので、教科書を正確に音読しているのか教員が集中して傾聴し、場合によっては手助けしなければなくなっている。また、教科書の音読は、指名されなかった学生が無為に過ごしてしまうことがしばしばあるので、基本的に教員が机間巡視をして、全受講生が教科書の本文や図表に目を向けるよう促している。このように、机間巡視をしつつ、パソコンを操作し、スクリーンを図示して、学生に問いかけながら解説しするという授業スタイルのため、教員が休む間もなく動き回っている（がんばりすぎという）印象を持たれたのかもしれない。

ところで、本授業は前述のように自然地理学の基礎というカリキュラム上の位置づけであり、この後、「自然地理 II」や「日本地誌（地域地理学）」「環境地理学」に展開されていく。「自然地理 II」

では、「自然地理 I」で習得した基礎知識をベースとして、地形図読図や空中写真の判読など、自然地理学的事象を解明するための研究方法の習得を狙いとしている。つまり、「知識の習得（講義）」と「研究方法の習得（演習）」を、はっきりと区分してカリキュラムを構築している。しかし、本年度前期の「自然地理 II」（2回生担当）では、授業終了後の受講生アンケートで、「自然地理 Iとの関連をもう少し示して欲しかった」という意見があった。

このような「自然地理 II」への学習の展開と今回の公開授業の助言を参考として、「自然地理 I」においても受講生に地形図の作業を体験させるという授業改善が考えられる。「自然地理 II」で行う地形図読図の導入という位置づけであり、読図で読み取れたことを学生に発表させるなどして、教員主導から学生主導の学びの時間を確保することができるのではないだろうか。

2) 授業改善の成果

今年度の授業では、全体の内容を精選して読図の時間を確保することは難しかった。しかし、1月の大学入試センター試験に出題された地形図が、その後の授業テーマの「湖」の学習に適したものであったため、授業時に読図問題のみを印刷して受講生に配布し、解答させてみた。

Web で公開されていた試験問題の地形図が鮮明でなかったこともあり、挙手で確認した解答の正答率は高くなかった。しかし、受講生は近隣の席の受講生と相談しながら地形図に見入り、解答に関する教員の説明にも熱心に耳を傾けていた。受講生の興味・関心を喚起させる上でも、読図作業は有効であり、それが「自然地理 II」を履修する動機付けになっていく可能性がある。

4. 今後の課題

今年度の授業公開でいただいた助言と、その後の改善から、基礎知識を習得するという本授業においても、読図作業のような演習を行うことの意義が見いだされた。しかし、読図の演習は、作業そのものと作業結果の考察で、かなり時間をとることが予想される。現在でも内容が過密気味であるので、今一度、内容の精選を行って、作業時間の確保に取り組みたい。

謝辞

社会科専修の岡村茂先生と張貴民先生には、お忙しいところ授業公開にご参加いただき、大変有益なご助言をいただきました。心より厚く御礼申し上げます。